

長野義言『活語初の栞』における動詞の自他意識

——『詞の通路』上下対置語との比較による考察——

深澤 愛

一 はじめに

その存在が認知されていながら、これまでに顧みられることになかった国学書は少なくない。長野義言著『活語初の栞』もそのような国学書の一つである。

くわつご うひ の しをり 活語初の栞 一卷

長野義言撰 堀内廣城等校、直元序、瀧野知雄跋

この書は、働詞の自他と、詞の延約とを説きたるものにて、

詞の通路の説を敷衍したるなり、末に年月并に春夏秋冬十二ヶ月の名義をときたる條あり、

吉川（一〇九二）にこのように記されながらも、これまで内容が詳しく報告されることはなかった。「義言は本居宣長の正統の後継者をもつて自任し、著書八十余种を著した。が、その多くは散逸したことなどのために世人の知ることの少い国学者・語学者・歌学者であり、また政治家でもあつた」（井之口（一九五三）五頁）とされる著者の状況も、同書が顧みられてこなかった理由の一つであろう。また、同書が本居春庭『詞の通路』に大きく寄りかかった書であることも理由の一つと思われる。先行書に大きく拠ることにより、学史的な価値があまり認められなかったと考え

られるのである。とはいえ、『活語初の栞』は先行書の単なる模倣ではない。とすれば、どのような論なり国語史観なりが記載されているかを知ることが、国語学史研究を充実したものにするには必要な作業であると考ええる。

本稿は、『詞の通路』がどのように発展継承されていったかの例の一つとして『活語初の栞』に注目する。ささやかながら、学史的研究所への寄与を目指すものである。

二 大阪大学図書館蔵『活語初の栞』

『活語初の栞』の版本所蔵者は、『補訂版国書総目録』には次のように記載されている。

①嘉永三年 ②国会 国会亀田・内閣・静嘉・宮書・学習院・京大・国学院・東大・東北大狩野・広島大・大阪府・神宮・茶岡武藤・無窮神習

また、『古典籍総合目録』には次のように記載されている。

①弘化二跋 ②弘化三年版—福井大好日・弘前、その他—大阪女子大

本稿で取り上げる大阪大学附属図書館蔵本は、これらには記され

ていない。同大学附属図書館には、三冊の『活語初の葉』が所蔵されている（整理番号二二〇、二二一、五九二）。代表として整理番号二二〇の書誌を次に記す。

題：〈外題〉活語初の葉 〈内題〉活語初乃葉 〈尾題〉初乃しをり 表紙：26.1×18.0 cm。左肩単枠題簽「活語初の葉」装幀：袋綴。遊紙なし。丁数：序5丁、本文42丁、跋3丁。
柱：柱題「初乃葉」・丁数。 匡郭：20.0×14.3 cm。 序・跋：真元 序／弘化二年八月 伊勢の國人 瀧野知雄 跋

奥書：

桃廼舎藏板	活語初乃葉 出版
	末分櫛附録 近刻
	通路街乃葉 同
標 假名萬葉集 同	

その他：本文冒頭「長野義言著」、本文末尾「弘化三年二月十五日 堀内廣城校合／伊吹山下馬淵安由書」

阪大蔵本は三冊とも複数箇所2)の匡郭欠損部分の一致から同板と考えられる。また、『補訂版国書総目録』『古典籍総合目録』に所蔵が明記されている版本と比較したところ、これらとも匡郭欠損部分の一致を見た。以下本稿では大阪大学附属図書館蔵本に拠って稿を進めるが、述べるところは、他の所蔵本においても同様となろう。

『活語初の葉』は弘化二（一八四五）年の跋文を持つが、開板時期は明らかではない。ただ、本文末尾に弘化三年校合とあるこ

と、そして次の吉田（一九七三）の記述から、跋文が記されてからさほど隔たらない時期に開板されたものと考えられる。

義言はその著述の開板を急ぐように広域に懇願していたが、「堀内家略歴」弘化三年の条に、「五月、末分櫛彫刻成ル」とあって、義言の念願が達せられたことがわかる。（中略）「末分櫛」の開板の時期は、「堀内家略歴」で明らかになったが、借金の一部をその方へ廻してほしいと頼んだ「初の葉」開板の時期は、略歴に見えないので不明である。しかし、「末分櫛」に先だつて開板されたようである。それは「初の葉」の奥付に、「桃廼舎藏板」として、最初に「活語初乃葉出版」とあり、近刻の分として、「末分櫛附録」「通路街乃葉」「標注仮字万葉集」の書名が挙げられているからである。「初の葉」の末尾に、「弘化三年二月十五日、堀内広城校合」とあるから、同書の開板がわずかに先で、ほとんどそれにつづくようにして、「末分櫛」の開板となったと思われる。（二八一—二頁）

三 国語学史上の位置付けへの手がかり

長野義言と国学との関わりは、古く小林（一九四一）や井之口（一九五三）などで、その著述の紹介とともに行われている。比較的近年のものでは、吉田（一九九一）が詳しい。

長野主膳、諱は義言、初称は主馬、号を桃廼舎ものやといい、国学者である。（中略）長野とはいかなる人物であったか、近江に現れる前、前半生不明のまま、天保十年飄然と紀州藩領の

伊勢国飯高郡川俣郷宮前村字滝野に現れ、角屋甚兵衛なる旅館に身を投じたところで、彼の後半生が始まる。長野は松坂で同所の滝野次郎知雄（後藏人、次郎左衛門）方の鈴屋国学の蔵書を聞き、それに引かれて来たのである。滝野家は、寛永參勤交代の折、和歌山街道が紀州侯の通り道となったときからの本陣であった。知雄は本居春庭・大平の門人で、長野はその蔵書を借り受けて研究に励んだ。長野はここで大庄屋・勘定奉行直支配郷士の堀内広城（良勝）の知遇を得るが、広城もまた大平の門人で、後には子息千稲（良広）と共に彼の庇護者となる。（中略）滝野に姿を見せた前後七年間は、滞在といっても四、五日から十日ほどで、一度五十日ほどいたこともあったが、長逗留はなかったという。同年三月長野は多紀を伴って伊勢の河崎を出船してから、尾張・三河・美濃を遊歴し、行く先々で国学を講じた。いわば漂泊の国学者であった。（吉田（一九九一）一二六―七頁）

こうした指摘からも、本居春庭の影響に注目することが、長野義言の著書を学史的に位置付けるのに有効な視点であることが窺われる。

また、『活語初の葉』の大意や凡例には、次のような記述がある。

古への言葉をとくにも哥をよむにも先ことはの活用をよくわきまへしらずては其意得がたき事多し。かれ今言葉の活用をしめさんに語の自他と延約を委く圖して初学びの為にさとりやすからしむ。さるはこの事おのれはじめて思ひよれるにもあらず、已に本居の春庭翁の詞の通路といふものにかつぐ出

されたるにそへてこの圖はさらに設たり。（大意一オ）

○四段の活一段の活中二段の活下二段の活きなどいふは、詞のやちまたに出たる名をかりていへれば、その活きまは本書またかつみふりによりてわきまふべし。又未然統用切止統躰已然外トハアラキ活等の名はかつみふりにいへればそをみてしるべし。さてそのこととけるは、若狭の国の僧義門があらはせる書に大かたことはくはしけれど、それはた誤なきにあらねば、次に通路ちまたのしをりといふ書してしめさん。

これらによつても分かるように、同書は『詞の通路』に負うところ多大である。また、前半部「詞乃自他圖説」の目録の名称を見ても、活用の仕方の異なる動詞の組み合わせを示した『詞の通路』上下対置語を参照していることは推測に難くない。

詞乃自他圖説

詞乃延約圖説

目録

目録

- 四段活語より下二段に行格 ○初語より||に延る例 一丁 廿二ウ
- 下二段活語より四段に行格 ○佐行四段に延る例 四ウ 廿四ウ
- 四段より下二段に行圖説 ○波行四段に延る例 廿七オ
- 下二段より四段に行圖説 ○同下二段に延る例 廿八ウ
- 六オ
- 六ウ
- 六ウ
- 六ウ
- 外活使と令活用の校定 ○二重に延る例 卅一オ
- 自己差別わきまへ乃説 ○良行四段に延る例 廿九ウ

八オ

○同し、とせしとのわきまへ ○使令語オホスルをねに延る例
冊一ウ

冊一ウ

○四段活より佐行四段に行格 ○同二重に延る例 冊二オ

八ウ

○同一段中下の二段より行格 ○近躰約語之例 冊三オ

十オ

○四段活より佐行下二段に行 ○古風約語之例 冊四オ

格 十二ウ

○同一段中下の二段より行格 ○同二重に約例 冊四ウ

十五オ

○良行より他の四段に行格 ○同初四轉したる例 冊五オ

十六オ

○同他の下二段にうつり行格 ○年月日の名義 冊六オ

十六ウ

○他の行より良行下二段に行 ○春夏秋冬の名義 冊六ウ

格 十八ウ

○同良行下二段自他に互格 ○十二ヶ月の名義 冊七ウ

廿オ

とはいえ、次節以降にみるように、『活語初の葉』に収録された図表を丹念に見てみると、『詞の通路』の単なる引き写しや要約などではないことが分かる。より分析が深化されたと思われる箇所があるのである。その意味で、学史的にも同書は意義あるものと考えられる。以下では、『詞の通路』との対照を行いつつ、『活語初の葉』の学史的意義を考えてみたい。

四 『活語初の葉』自他表における「他」の意義

前半部「詞乃自他圖説」では、動詞を活用ごとに「自」「他」に分類して、該当する語を一覧できるようにされた図表が中心となっている。図は上段に「自」、下段に「他」が対置されている。「四段活語より下二段に行格」の場合を例に次に挙げておく(表は、本文一ウ～四オより、各行の先頭の語をまとめたもの)。以下、こうした図を「自他表」と呼ぶことにする。

それぞれの図には「自」「他」の意義が図ごとに記されている。今挙げた「四段活語より下二段に行格」の場合は、「自」の意義は「おのづからしかる・みづからしかす」、「他」の意義は「他よりしからしむる」である。自他表に記載された「自」「他」の意義を、各図表ごとにまとめると次のようになる(項目名は前掲目録による)。

波行	多行	佐行	加行	自	他
四段活	四段活	四段活	四段活	おのづからしかる みづからしかす	他よりしからしむる
浮	育	遣又	開	あき	あけ
うかび	そだち そだつ	おこす	あく	あくる	あくる
同行	同行	同行	同行	あき	あけ
下二段活	下二段活	下二段活	下二段活	あくる	あくる
うかべ	そだち そだつ	おこす	あくる	あくる	あくる

羅行	末行				
四段活	四段活				
入	赤々成				
いる	いり	あかみ	あかみ	うかぶ <small>ム</small>	
		あかむ	あかむ		
同行	同行				
下二段活	下二段活				
いる、	いれ	あかむる	あかめ	うかぶ <small>ム</small>	

(1) 四段活語より下二段に行格(二丁)《四段―他下二段》
 ①おのづからしかる・みづからしかす ②他よりしか
 らしむる

(2) 下二段活語より四段に行格(四ウ)《自下二段―他四段》
 ①おのづからしかる・みづからしかす ②他よりなす

(3) 四段活より佐行四段に行格(八ウ)《自四段―他サ行四段》
 ①おのづからしかる・みづからしかす ②他よりなす

(4) 同一段中下の二段より行格(十オ)《自中二段・下二段―他サ行四段》
 ①おのづからしかる・みづからしかす ②他よりなす

(5) 四段活より佐行下二段に行格(十二ウ)《自四段―他サ行下二段》
 ①おのづからしかる・みづからしかす ②他よりしか

らしむる

(6) 同一段中下の二段より行格(十五オ)《自中二段・下二段―他サ行下二段》
 ①おのづからしかる・みづからしかす ②他よりしか

らしむる

らしむる

(7) 良行より他の四段に行格(十六オ)《自ラ行四段―他その他の行四段》
 ①おのづからしかる ②他よりなす

(8) 同他の下二段にうつり行格(十六ウ)《自ラ行四段―他その他の行下二段》
 ①おのづからしかる・みづからなす ②他よりしか

せしむる

(9) 他の行より良行下二段に行格(十八ウ)《自ラ行以外の行―他ラ行下二段》
 ①自からしかす・他よりしかす ②他にしかせらる、

(10) 同良行下二段自他に亘格(廿オ)《ラ行以外の行―自他ラ行下二段》
 ①自からしかす・他よりしかせらる、

「自」「他」とが同欄であるが、掲載されている語等から敢えていえば、「自みづからしかせらる、」「他他よりしかせらる、」に分類することができる。

こうした「自」「他」の意義は、『詞の通路』の上下対置語を参照したものと考えられる。このようにして見てみると、一見自他表は上下対置語を並べ直しただけのようにだが、意義の部分の詳細に検討すると、それが単なる引き写しではないことが分かる。

『活語初の栞』凡例では、自他は次のように説明される。

○言語の自他をいふは、先カ加行四段の活也。おもむくは、自身ワガにおもむくも他人のおもむくも、そのおもむく方につきていふ

はみな自とし、又自より他をおもむかするも人の他をおもむかするも、わざしておもむかしむるはみな他といへり。餘は

ならずらへてしるべし。(大意二ウ)

「おもむく」の場合は、「自より他をおもむかする」も「人の他をおもむかする」も同様に「他」に含めるとしている。分類にあたって、注目されているのは「他をおもむかする」ことである。

(1) を例に見てみよう。(1)の「他」は「他よりしからしむる」と説明される。この場合、「開け・開くる」は、他より「開く」の状態にせしめるということであり、「遣こせ・遣こする」は他より「遣こす」の状態に、「育て・育つる」は他より「育つ」状態にそれぞれせしめるということである。「他」というのは、行為者により、行為の対象がどういう状態に至ったのか、その変化結果の状態を表しているものと考えられるのである。(5)
(6)の「他よりしからしむる」も同様に考えられる。(2)と(4)、(7)の「他よりなす」には次のような語が列挙されている。

- (2) (開) かき・かく、(碎) くだき・くだく、(裂) さき・さく……
- (3) (動) あゆがし・あゆがす、(生・活) いかし・いかす……
- (4) (起) おこし・おこす、(過) すぐし・すぐす、(尽) つくし、つくす……
- (7) (継) つぎ・つぐ、(繋) つなぎ・つなぐ、(除) のぞき・のぞく……

これらも他より「開」「動」「起」「継」という状態になったことに記述の力点が置かれている。自他表に見る限り、義言は対象の結果状態に注目して分類を行っているのである。

これを『詞の通路』と比較してみよう。『詞の通路』では、主

に六段図と上下対置語によって動詞の分類が行われている。上下対置語は、活用の仕方異なる動詞の組み合わせを活用行ごとに示したものである。それらがどのような意義の違いを持つものであるかの説明が語の列挙の後に続く。

多行四段活詞 同下二段活詞

そたつ そたつる

たつ たつる

右上なるは物のおのつから然るをいふことは下なるは物を然るといふ詞なり

羅行四段活詞 同下二段活詞

いる いる、

右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは他に然るをいふことはなり

右の場合では、上段「そたつ」「たつ」「いる」は「おのつから然る」ことを表す語であり、下段「そたつる」「たつる」は「物を然る」「いる、」は「他に然る」ことを表す語だと説明される。

『活語初の栞』自他表に収録されている語は『詞の通路』上下対置語に列挙されたものと一致する。これにより、同じ語について『活語初の栞』と『詞の通路』との意義説明を比較することが可能である。自他表での「そだて・そだつる」「いれ・いる、」は「他よりしからしむる」とされるのに対し、上下対置語では「そたつる」は「物を然る」「いる、」は「他に然る」と説明される、という具合にである。

次の表は、右の方法によって、前掲(1)から(10)にあたる

「自」「他」の意義について、自他表での意義と、それに対応すると考えられる上下対置語での意義説明とを対照表にしたものである。

	(1)		(2)		(3)		(4)		(5)
	他	自	他	自	他	自	他	自	自
活語初の葉	おのづからしかる・みつからしかす	他よりしからしむる	おのづからしかる・みつからしかす	他よりなす	おのづからしかる・みつからしかす	他よりなす	おのづからしかる・みつからしかす	他よりなす	おのづからしかる・みつからしかす
詞の通路	おのづから然る・みつから然する	ものを然する・他に然する	おのづから然る	ものを然する	おのづから然る	ものを然する・ものを然する	おのづから然る・みつからしかする	物を然する・他にしかする	みつから然する

	(6)		(7)	(8)		(9)	(10)	
他	自	他	自	令	自	被	上	下
他よりしからしむる	おのづからしかる・みつからしかす	他よりしからしむる	おのづからしかなる・みつからなす	他よりしかせしむる	自からしかす・他よりしかす	他にしかせらる、	自らしかす・他よりしかす	みづからしかせらる、他よりしかせらる、
他に然さず・他に然する	おのづから然る	ものを然する	おのづから然る・みつから然する	物を然する・みつからしかする	みつから然する・物を然する	他にしかせらる、	物を然する	みつから然せらる、と他に然せらる、とをかねていふ

こうして対比させてみると、「自」に関する説明は両者同様であるが、「他」の捉え方が異なっていることが分かる。『詞の通路』の説明は、「ものを然する」または「他に然する」である。対象

への働きかけに着目した説明であり、『詞の通路』における「他」の捉え方は、行為者に注目したものと言うことができる。これに対して『活語初の葉』における「他」は、先にも述べたように対象の変化結果の状態に注目した説明がなされている。

『活語初の葉』における「他」の捉え方は、『詞の通路』におけるその単なる模倣ではなく、そこから他動性についての考察の深化を図ったものとなっているのである。

五 『活語初の葉』 自他表と『詞の通路』 上下対置語

—配置基準をめぐって—

『活語初の葉』に収録される語は、すべて『詞の通路』にも記載の見える語である。ここからもやはり同書が『詞の通路』に大きく拠っていることが窺えるのであるが、そこに収録された語の配置を見ると、義言が同書を著すにあたって自覚的であった部分が明らかになってくる。そしてそれは、『詞の通路』とは異なる態度であると考えられるのである。

以下に、『詞の通路』上下対置語について、『活語初の葉』(Ⅰ)(10)に該当するものを挙げる。活用行ごとに、「上段—下段：列挙された語(上段—下段)：説明」の順である。丸数字の下に「*」があるものは、『詞の通路』と『活語初の葉』とで上—下と自—他との対応が逆であるものである。

Ⅰ(Ⅰ)に該当

① 加行四段活詞—同下二段活詞：しりそく—しりそくる／たひらく—たひらくる／つ、く—つ、くる／のく—のくる／やはら

く—やはらくる…右上なるは物のおのつから然るをいふ詞下なるはものを然するをいふ詞なり

② 佐行四段活詞—同下二段活詞：ふす—ふする…右上なるはみつから然するをいふことは下なるはものを然するをいふことはなり

③ 多行四段活詞—同下二段活詞：そたつ—そたつる／たつ—たつる…右上なるは物のおのつから然るをいふことは下なるは物を然するをいふ詞なり

④ 波行四段活詞—同下二段活詞：たがふ—たがふる／ちがふ—ちがふる／つどふ—つどふる／と、のふ—と、のふる／ならぶ—ならぶる…右上なるは物のおのつから然るをいふ詞下なるはものを然するをいふ詞なり

⑤ 麻行四段活詞—同下二段活詞：す、む—す、むる／たゆむ—たゆむる／なくさむ—なくさむる／やむ—やむる／ゆかむ／ゆかむる…右上なるは物のおのつから然るをいふことは下なるは物を然するをいふことはなり

⑥ 羅行四段活詞—同下二段活詞：いる—いる、…右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは他に然するをいふことはなり

Ⅱ(Ⅱ)に該当

① 加行下二段活詞—同四段活詞：たくる—くたく／とくる—とく／ぬくる—ぬく／はくる—はく／やくる—やく…是は上なるとかへさまにて下二段活の方も、おのつから然るをいふ詞四段活の方もを然するをいふ詞なり

② 波行中二段活詞—同下二段活詞：のぶる—のぶる…右上なるはおのつからしかるをいふことは下なるはものをしかするをい

ふことはなりさてかくともにのふると挙てはまきはしけなれ
とすわりたることはにてあくるかすへての例なればなり

③ 羅行下二段活詞―同四段活詞…きる、―きる／ほる、―ほる
／やぶる、―やぶる／わる、―わる／をる、―をる…是は上な
るとかへさまにて下二段の万物のおのつから然るをいふ詞四段
活の方もを然するをいふ詞なり

Ⅲ (3) に該当

① 加行四段活―佐行四段活…うこく―うこかす／おとろく―お
とろかす／かわく―かわかす／なひく―なひかす／わく―わか
す…右上なるはおのつから然るをいふことは下なるは他を然す
るをいふことはなり

② 波行四段活―佐行四段活…うるふ―うるほす／およふ―およ
ほす／かよふ―かよはす／さすらふ―さすらはす／まどふ―ま
どはす…右上なるはおのつからしかるをいふことは下なるはも
のを然するをいふ詞なり

③ 麻行四段活―佐行四段活…くろむ―くろます／すむ―すます
／とよむ―とよます／なやむ―なやます／はけむ―はけます…
右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふ
ことはなり

④ 羅行四段活―佐行四段活…くゆる―くゆらす／ちる―ちらす
／てる―てらす／なる―ならず／めくる―めくらす…右上なる
はおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふことはな
り

⑤ 佐行四段活―羅行四段活…かへす―かへる／さとす―さとる
／のこす―のこる／やとす―やとる／わたす―わたる…右上な

るは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことは
なり

Ⅳ (4) に該当

① 多行中二段活―佐行四段活…おつる―おとす／おづる―おど
す／くつる―くたす／ひつる―ひたす…右上なるはおのつから
然るをいふ詞下なるは物を然するをいふ詞なり

② 波行中二段活―佐行四段活…おふる―おほす／ほろふる―ほ
ろほす／ほころふる―ほころはす…右上なるはおのつから然る
をいふ詞下なるは物を然するをいふ詞なり

③ 麻行中二段活―佐行四段活…あむる―あむす…右上なるはみ
つからしかするをいふことは下なるは他にしかするをいふこと
はなり

④ 麻行下二段活―佐行四段活…さむる―さます…右上なるはお
のつからしかるをいふ詞下なるは物を然するをいふことはなり

⑤ 也行下二段活―佐行四段活…あゆる―あやす／いゆる―いや
す／つひゆる―つひやす／はゆる―はやす／もゆる―もやす…
右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふ
ことはなり

⑥ 羅行中二段活―佐行四段活…おる、―おろす／こる、―こら
す／ふる、―ふるす…右上なるはおのつから然るをいふことは
下なるは物をしかするをいふ詞なり

⑦ 羅行下二段活―佐行四段活…ある、―あらず／かる、―から
す／くる、―くらす／つかる、―つからす／ぬる、―ぬらす…右
上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふこ
とはなり

⑧ 佐行四段活―羅行下二段活…あらはす―あらはる、／くつす―くつる、／けかす―けかる、／こほす―こほる、／たふす―たふる、…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然するをいふことはなり

V (5) に該当

① 加行四段活―佐行下二段活…おく―おかする／かく―かかす／さく―さかす／はく―はかする／ふせく―ふせかする…右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さずるをいふことはなり

② 多行四段活―佐行下二段活…うつ―うたする／かつ―かたする／たつ―た、する／まつ―またする／もつ―もたする…右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さずるをいふ詞なり

③ 波行四段活―佐行下二段活…あふ―あはする／くふ―くはする／た、かふ―た、かはする／とふ―とはする／ぬふ―ぬはする…右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さずるをいふことはなり

④ 羅行四段活―佐行下二段活…か、ふる―か、ふらす／つく―つくらす／はしる―はしらす／まもる―まもらする／まゐる―まゐらす…右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さずるをいふ詞なり

⑤ 麻行四段活―佐行下二段活…すむ―すます／のむ―のます／よむ―よます／をかむ―をかます…右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さずるをいふことはなり

⑥ 佐行下二段活―羅行四段活…のする―のる／よする―よする…

右上なるは他に然するをいふ詞下なるはみつから然するをいふことはなり (下略)

VI (6) に該当

① 加行中二段活―佐行四段活…おくる―おこす／すくる―すくす／つくる―つくす…右上なるはおのつから然するをいふ詞下なるはものを然するをいふことはなり

② 加行下二段活―佐行四段活…あくる―あかす／ふくる―ふかす…右上なるはおのつから然つをいふ詞下なるは物を然するをいふことはなり

VII (7) に該当

① 加行四段活―羅行四段活…つぐ―つがる／のそく―のそこる／ふたく―ふたかる／わく―わかる…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつからしかるをいふことはなり

② 麻行四段活―羅行四段活…た、む―た、まる…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然するをいふことはなり

VIII (8) に該当

① 加行下二段活―羅行四段活…かくる―か、る／さくる―さかる／さがる―さがる／たすくる―たすかる／ひろくる―ひろかる…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然するをいふことはなり

② 多行下二段活―羅行四段活…あつる―あたる／すつる―すたる…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然するをいふことはなり

③ 奈行下二段活―羅行四段活…かさぬる―かさなる／つらぬる―つらなる…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから

しかるをいふことはなり

- ④*波行下二段活―羅行四段活…かふる―かはる―かはる／くはふる―くはふる／さふる―さはる／たつさはる―たつさはる／をふる―をはる…右上なるはみつからしかするをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

- ⑤*麻行下二段活―羅行四段活…あつむる―あつまる／あらたむる―あらたまる／きはむる―きはまる／とむる―とまる／をさむる―をさまる…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

- ⑥*和行下二段活―羅行四段活…する―すわる…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはみつから然るをいふことはなり

IX (9) に該当

- ① 加行四段活―羅行下二段活…あさむく―あさむかる、／いつく―いつかる、／はしく―はしかる、／はふく―はふかる、／まねく―まねかる、…右上なるはみつから然るをいふことは下なるは他にしかせらる、をいふ詞なり

- ② 佐行四段活―羅行下二段活…ころす―ころさる、／その、かす―そ、のかさる、／めす―めさる、／もてなす―もてなさる、／もどす―もどさる、…右上なるは物を然するをいふ詞下なるは他に然せらる、をいふことはなり

- ③ 波行四段活―羅行下二段活…きらふ―きらはる、／さそふ―さそはる、／ましなふ―ましなはる、／やしなふ―やしなはる、／やとふ―やとはる、…右上なるはみつから然るをいふことは下なるは他にしかせらる、をいふ詞なり

- ④ 麻行四段活―羅行下二段活…うつむ―うつもる、／かこむ―

かこまる、／にらむ―にらまる、／ぬすむ―ぬすまる、／ねたむ―ねたまる、…右上なるは物を然りするをいふ詞下なるは他に然せらる、をいふことはなり

- ⑤ 羅行四段活詞―同下二段活詞…あなつる―あなつらる、／いのる―いのらる、／そしる―そしらる、／まもる―まもらる、／はかる―はかる、…右上なる物を然するをいふ詞下なるは他に然せらる、とおのつから然せらる、とをかぬいふ詞なり (下略)

X (10) に該当

- ① 多行四段活―羅行下二段活…あやまつ―あやまたる、／かこつ―かこたる、／こほつ―こほたる、／たもつ―たもたる、…右上なるは物を然するをいふ詞下なるはみつから然せらる、と他に然せらる、とをかぬいふ詞なり

上―下と自―他の対応は、多くの項目で一致してはいるが、そうではないものもある。一致を見ないのは、Ⅲ⑤佐行四段活―羅行四段活、Ⅴ⑥佐行下二段活―羅行四段活、Ⅶの全て及びⅧの全てである。

『詞の通路』上下対置語が自他や他自の順ではないことは既に先学によって指摘されている通りである。その配置基準は、野村(二九八六)には次のように説明されている。

「自他のわかる、」上下対置語は、恐らく次の原則に従って上下の順位が与えられていると思われる。春庭は「自他のわかる、」様子を、活用形態によって次の様に分類している。

- ① 同じ行で分かれるもの、② サ行にうつつて分かれるもの、③ ラ行にうつつて分かれるもの、④ その他のもの。このうち

②と③は、サ行、ラ行にうつつて分かれるが、ア「おのつか
ら佐行と羅行とにて自他のわかれたる例」では、必ずサ行の
語が上置されている。イ「加行より也行にうつりて自他のわ
かる、」例はただ一組であるが、カ行の語が上置されている。
ウ「清濁によりて自他のわかれたる」例もただ一組であるが、
清音のものが上置されている。エ「一段の活詞」については
共通して言い得ることは、対置語の上下は、活用に基づく語
形態の変異に従って順序付けがなされているという事である
う。(九五—六頁)

上下の配置にあたって春庭が注意したのは、語形態の変異であつた。このように配置された語を、義言は『活語初の葉』において明確な自—他への意識をもって分類したことになる。

さらに注目されるのは、全ての項目において上—下と自—他とが逆であつたⅦ及びⅧである。これらは『活語初の葉』の(7)は「自—使」に、(8)では「自—令」という項目名になっている。

『活語初の葉』には、「外活使と令活用の校定」「使令をねに延たる例」などの項目はあるが、「使」「令」がいかなる意義であるのかは説明されていない。「外活使と令活用の校定」では、次のように例を挙げている。

是は上_三いへる他よりしからしむる_二四段と下_二二段とあるを_レ佐行のま、にいへるにてたとへばおのづから海川わたるは_レ行四段の活そを他よりわたす_レ使_レ渡_二て_レさ行四段_三活又おのづからしる_レ知の字_二て_レら行四段_三の活そを他よりしらせし

するは令_レ知_二て_レさ行下二段_三活けり(八才)

これでも「使」「令」の意味するところは判然とはしないが、義言が語を配置するにあたって、ただ「自」「他」の二項目に分けることだけを意図したのではないことは窺い知ることができる。分類される語への義言なりの深い洞察が見て取れる。こうした洞察は、語が表す対象の状態変化に着目したからこそ為し得たものであつただろう。前節で窺い見た義言の「他」の性質への着眼点は、『活語初の葉』を貫く、かなり自覚的なものと言うことができるのである。

六 おわりに

本稿では、長野義言『活語初の葉』の自他表に注目し、そこに見られる義言の「他」への意識の記述を試みた。同書は『詞の通路』と同じ語群を分類しながらも、それは単なる模倣ではなく、より「自」「他」の枠組みに自覚的であつた。そしてそこには、他動性の本質の記述への指向が見て取れるのである。その意味で、『活語初の葉』は『詞の通路』を発展的に継承した国学書の一つであると言えよう。また、本稿で見たように、『活語初の葉』には「使」「令」など、さらに検討を加えるべき分類がある。これらについては稿を改めて論じることにした。

【参考文献】

井之口有一(一九五三)「長野義言著『指出廻磯弁』(稿本)につ

いて『滋賀県立短期大学雑誌B』

小林好日(一九四一)「長野義言と豆爾波研究」『国語学の諸問題』

岩波書店

島田昌彦(一九七五)「詞の通路」の「自他」『金沢大学法文学

部論集文学編』一三三

島田昌彦(一九七九)『国語における自動詞と他動詞』明治書院

中野三敏(一九九五)『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店

野村剛史(一九八六)『詞通路』「詞の自他の事」を読む』『論集

日本語研究(二)』歴史編、明治書院

吉田常吉(一九七三)「長野義言とその庇護者堀内広城・千稲父

子」『日本歴史』三〇〇

吉田常吉(一九九一)『安政の大獄』(日本歴史叢書四六)吉川弘

文館

吉田常吉(一九九二)「長野義言と一家のことども―再び堀内家

を訪れて―」『日本歴史』五三〇

渡辺英二(一九九五)『春庭の語学研究―近世日本文法研究史―』

(研究叢書一六一)和泉書院

【注】

(1) 整理番号二二一、五九一についても、書誌は基本的に同じ

(表紙・匡郭の大きさに極若干の違いがあるのみ)である。

また、二一〇には、見返しに次のような書き込みがある。

明治十三年彼月某日予試を受けて彦根師範学校ニ入学す
ること得たり尔後孜々乎として勉学するに善友の助なく

唯々陋生をして懇切に誘掖して以て業を終へしむるはこ
の小椋美君ありしのみ元々に今十三年伍月卒業期ニ垂ん
とす爰ニ此書を寄し交誼を後年に垂る矣

明治十三年五月上旬 龍 香雨生 謹白

(2)

直接確認したのは、大阪府立中之島図書館蔵本及び大阪女
子大学附属図書館蔵本。また、静嘉堂文庫蔵本及び東北大学
狩野文庫蔵本については、マイクロフィルムで確認した限り
では同様の欠損箇所が見られる。

(ふかざわ あい・同志社大学非常勤講師)